知名町埋蔵文化財発掘調査報告書〔8〕

県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

志喜屋武当遺跡（しきゃんとう）

遺跡より東シナ海を望む

2002年３月
鹿児島県知名町教育委員会

住居跡遺物出土状況

焼土検出状況

序　　文

本報告書は，知名町教育委員会が実施した，畑地帯総合整備事業（担い手育成型）第一住吉地区に所在する志喜屋武当遺跡・下田遺跡などの発掘調査を記録したものです。

志喜屋武当遺跡は，平成７年度に農業農村整備事業に伴う遺跡分布調査を行った際に発見されました。平成11年度に，国・県の助成を得て確認調査を実施したところ，住居跡，柱穴等が確認されたため，平成12年度に緊急発掘調査を行うこととなりました。

発掘調査の結果，志喜屋当遺跡では，縄文時代前期の土器や縄文時代の住居跡などの貴重な遺構・遺物が出土しました。

これらの貴重な成果をまとめた本報告書が広く活用され，南西諸島の歴史を解明する一助となれば幸いです。

平成11年度の確認調査から本年度の報告書作成にわたり，ご指導・ご協力くださった県教育庁文化財課，沖永良部事務所土地改良課，県立埋蔵文化財センター，並びに暑い中での発掘調査に参加された地元作業員の方々には深く感謝申し上げます。

平成14年３月

知名町教育委員会

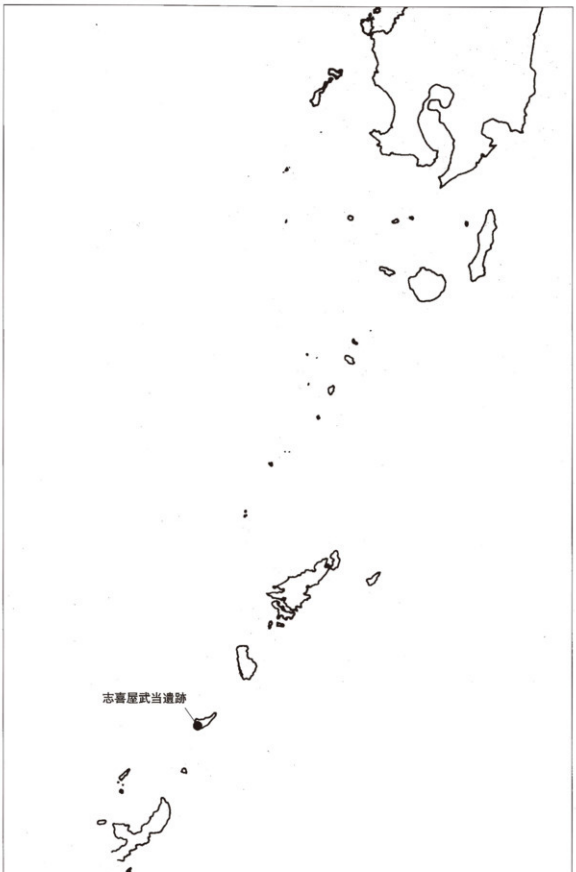
教育長　根　釜　昭　夫

報告書抄録

ふりがな	しきゃんとういせき
書名	志喜屋武当遺跡
副書名	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う埋蔵文化財報告書
巻次	
シリーズ名	知名町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	（8）
編著者名	森田太樹・堂込秀人
編集機関	知名町教育委員会
所在地	〒891-9214　鹿児島県大島郡知名町知名307番地　℡ 0997-93-3111
発行年月日	2002年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
しきゃんとういせき 志喜屋武当遺跡	かごしまけん 鹿児島県 おおしまぐん 大島郡 ちなちょうすえよし 知名町末吉 しきゃんとう 志喜屋武当			27° 21′ 45″	128° 31′ 40″	確認調査 19990830 ～19990914 20000124 ～20000126 本調査 20000703 ～20000804 20001113 ～20001205	1,150㎡	県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志喜屋武当遺跡	集落	縄文時代 縄文時代前期	竪穴式住居　1基	土器片 石器 磨石、敲石 凹石 貝殻条痕文土器 石器	記録保存



第1図　志喜屋武当遺跡の位置

例　言

1．この報告書は1999年・2000年に実施した県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う確認・本発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は，鹿児島県農政部（沖永良部事務所土地改良課）からの受託事業として知名町が受託し，調査主体者となり実施した。発掘調査は，鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導，協力を得た。

3．本書で用いたレベル数値は，県農政部（沖永良部事務所土地改良課）が作成した地形図に基づく海抜高である。

4．遺物番号は，本文及び挿図・図版の番号と一致する。

5．発掘調査における測量・実測・写真撮影は，堂込・井ノ上・福永・森田，遺物の実測・トレースは，堂込・森田が主に行い，遺物写真撮影は福永が行った。

6．本書の執筆・編集は森田・堂込が行った。

本文目次

序　　文
報告書抄録
例　　言
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　日誌抄 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5
第Ⅲ章　調査の概要 …… 12
　第１節　確認調査の概要 …… 12
　第２節　本調査の概要 …… 13
　第３節　志喜屋武当遺跡の調査 …… 14
　　１　Ｂ地点住居跡の調査 …… 14
　　（１）住居跡
　　（２）遺　物
　　２　Ａ地点の調査 …… 24
　　（１）出土状況
　　（２）遺　物
　　３　Ｃ地点の調査 …… 25
　　（１）出土状況
　　（２）遺　物
　　４　Ｄ地点の調査 …… 27
　　（１）出土状況
　　（２）遺　物
　第４節　その他の遺跡の調査 …… 30
　　１　阿岩遺跡 …… 30
　　２　二俣Ｂ遺跡 …… 30
　　３　下田遺跡 …… 30
第Ⅳ章　まとめにかえて …… 34

表　目　次

第１表　知名町遺跡地名表 …… 8
第２表　石器計測表 …… 33
第３表　土器観察表 …… 34

挿図目次

第１図　沖永良部知名町志喜屋武当遺跡の位置
第２図　周辺の遺跡 …… 7

第３図　二俣Ａ遺跡・二俣Ｂ遺跡・阿岩遺跡周辺地図及びトレンチ配置図……10
第４図　志喜屋武当遺跡・下田遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図……11
第５図　志喜屋武当遺跡表採土器……12
第６図　志喜屋武当遺跡住居跡遺物出土状況……14
第７図　志喜屋武当遺跡住居跡床面遺物出土状況……15
第８図　志喜屋武当遺跡住居跡完掘状況……16
第９図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（１）……18
第10図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（２）……19
第11図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（３）……20
第12図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（４）……21
第13図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（５）……22
第14図　志喜屋武当遺跡Ａ地点遺物出土状況……23
第15図　志喜屋武当遺跡Ａ地点出土土器……24
第16図　志喜屋武当遺跡Ａ地点出土石器……25
第17図　志喜屋武当遺跡Ｄ地点遺物出土状況……26
第18図　志喜屋武当遺跡Ｄ地点出土土器……27
第19図　志喜屋武当遺跡Ｃ・Ｄ地点出土石器……28
第20図　志喜屋武当遺跡Ｄ地点出土石器……29
第21図　二俣Ｂ遺跡遺物出土状況……31
第22図　二俣Ｂ遺跡出土土器……32
第23図　下田遺跡遺構配置図……33
第24図　阿岩遺跡遺構配置図……34

図　版　目　次

図版１　二俣Ｂ遺跡表土除去状況・作業風景……39
図版２　下田遺跡表土除去状況・遺構検出作業状況……40
図版３　志喜屋武当遺跡住居跡検出状況・焼土検出状況……41
図版４　志喜屋武当遺跡住居跡土器出土状況……42
図版５　志喜屋武当遺跡住居跡遺物出土状況……43
図版６　志喜屋武当遺跡住居跡清掃状況・完掘状況……44
図版７　志喜屋武当遺跡Ｄ地点掘り下げ状況・遺物出土状況……45
図版８　志喜屋武当遺跡Ａ地点遺物出土状況・二俣Ｂ遺跡遺物出土状況……46
図版９　下田遺跡遺構検出状況・阿岩遺跡遺構検出状況……47
図版10　現地説明会・発掘調査参加者……48
図版11　出土土器……49
図版12　出土土器……50
図版13　出土土器……51
図版14　出土土器・石器……52
図版15　出土土器……53
図版16　出土石器……54

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県農地整備課（沖永良部事務所土地改良課，以下県農政部）は，知名町第二知名西部地区及び第一住吉地区において担い手育成型畑地帯総合整備事業を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。これを受けて平成７年度に知名町教育委員会・知名町耕地課・文化財課・県農政部で実施した分布調査によって二俣Ａ遺跡・二俣Ｂ遺跡・阿岩遺跡・下田遺跡・志喜屋武当遺跡が存在する事が判明した。

この結果に基づき，知名町教育委員会・町耕地課・県農政部・文化財課の三者で埋蔵文化財の保護と事業の推進にかかる協議が重ねられ，事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を平成11年８月30日～平成11年９月14日，平成12年１月24日～平成12年１月26日に実施した。

確認調査の結果，志喜屋武当遺跡・下田遺跡・二俣Ｂ遺跡・阿岩遺跡に遺構・遺物が残存することが確認されたため，再度三者で協議がおこなわれた。協議の結果，遺跡の現状保存が困難であり，これらの遺跡については記録保存のため本調査を実施することとなった。本調査は平成12年７月３日～８月４日，平成12年11月13日～12月５日まで本調査を実施することとなった。発掘調査は知名町教育委員会が調査主体となり，県立埋蔵文化財センターの協力を得た。

第２節　調査の組織

＜確認調査＞

平成11年度

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課	（沖永良部事務所土地改良課）
調査主体者	知名町教育委員会	
調査責任者	知名町教育委員会	教育長　田中和夫
調査事務担当	〃	社会教育課長　大山　倭
		主　査　園田公子
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事　堂込秀人
	〃	文化財研究員　西村喜一
	〃	文化財研究員　桑波田武志

＜本調査＞

平成12年度

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課	（沖永良部事務所土地改良課）
調査主体者	知名町教育委員会	
調査責任者	知名町教育委員会	教育長　田中和夫
調査事務担当	〃	社会教育課長　大山　倭
	〃	主　事　平山ちはる
調査担当者	〃	主　事　補　森田太樹

	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事　堂込秀人
	〃	文化財主事　井ノ上秀文
	〃	文化財研究員　福永修一

≪報告書作成≫

平成13年度

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課	（沖永良部事務所土地改良課）
調査主体者	知名町教育委員会	
調査責任者	知名町教育委員会	教育長　田中和夫（H13・10月まで）
	〃	教育長　根釜昭夫（H13・10月着任）
調査事務担当	〃	生涯学習課長　大山　倭
調査担当者	〃	主事　森田太樹
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事　堂込秀人
	〃	文化財研究員　福永修一

発掘調査作業員

発掘調査作業員は，シルバー人材センターに委託した。

整理作業員

大山喜代美　清水はるみ　田中美恵子　森山美智子　岡越　豊　西千代乃

調査の事前準備・撤収等にあたっては，生涯学習課職員，耕地課職員の協力を得た。

第３節　日誌抄

発掘調査は，確認調査を各遺跡の作付状況から，平成11年度が８月30日～９月14日，平成12年１月24日～26日の２次に分けて実施した。平成12年度の本調査でも，作付と工事の進捗にあわせて６月12日～８月４日，11月13日～12月５日に実施した。報告書作成は，平成13年度に行った。

以下，日誌抄により調査の経過を略述する。

平成11年度　確認調査

８月31日（火）　二俣Ａ遺跡　１Ｔ～８Ｔまでトレンチ設定。重機による掘り下げ。

９月１日（水）　二俣Ａ遺跡　トレンチ内精査，写真撮影。二俣Ｂ遺跡　１Ｔ～４Ｔまでトレンチ設定。１Ｔ一部掘り下げ。

９月２日（木）　二俣Ａ遺跡　トレンチ配置図作成後，埋め戻し。二俣Ｂ遺跡　１Ｔ掘り下げ。トレンチ内精査後写真撮影。

９月３日（金）　雨天のため，作業員による作業は中止。阿岩遺跡　トレンチ掘り下げ（重機）。二俣Ｂ遺跡　一部トレンチ埋め戻し。

9月6日（月）　二俣B遺跡遺構（ピット）検出。精査後写真撮影。阿岩遺跡トレンチ掘り下げ（重機）。トレンチ配置図作成後埋め戻し。

9月7日（火）　二俣B遺跡　トレンチ埋め戻し。志喜屋武当遺跡トレンチ設定。重機にて表土除去後，作業員による掘り下げ。

9月8日（水）　志喜屋武当遺跡　トレンチ掘り下げ。精査，遺構検出。

9月9日（木）　志喜屋武当遺跡　トレンチ掘り下げ。遺構検出状況写真撮影。竪穴住居跡掘り下げ。調査済みトレンチ埋め戻し。

9月10日（金）　志喜屋武当遺跡　トレンチ掘り下げ。竪穴住居跡掘り下げ，状況写真撮影。トレンチ配置図作成。調査済みトレンチ埋め戻し。

9月13日（月）　志喜屋武当遺跡　トレンチ精密後，遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平板実測。トレンチ埋め戻し。

9月14日（火）　トレンチ埋め戻し，発掘器材，整理・片付け。

平成11年度　確認調査（2次）

1月24日（月）　下田遺跡　1T～4Tまでトレンチ設定。重機にて表土除去後，作業員による遺構検出。1T，4Tでピット検出。

1月25日（火）　志喜屋武当遺跡1T～3Tまでトレンチ設定。重機による表土除去。遺物・遺構なし。

1月26日（水）　下田遺跡　トレンチ配置図作成。遺構検出状況写真撮影。志喜屋武当遺跡1T～3T清掃後，写真撮影。トレンチ配置図作成。埋め戻し。

平成12年度　本調査

6月12日（月）　阿岩遺跡　トレンチ設定，重機にて表土除去。雨天のため遺構検出作業は中止。

6月13日（火）　阿岩遺跡　重機にて表土除去。遺構検出作業。

6月14日（水）　阿岩遺跡　重機にて表土除去。作業員による掘り下げ。

6月15日（木）　阿岩遺跡　作業員による掘り下げ。二俣B遺跡　重機にて表土除去。

6月19日（月）　二俣B遺跡　器材移動。

6月20日（火）　阿岩遺跡　ピット掘り下げ，出土状況写真撮影。調査範囲図，遺構出土状況平板実測。

6月21日（水）　二俣B遺跡　包含層掘り下げ。阿岩遺跡　埋め戻し。

6月22日（木）　二俣B遺跡　包含層掘り下げ。

6月23日（金）　二俣B遺跡　包含層掘り下げ。

6月26日（月）　二俣B遺跡　包含層掘り下げ。

6月30日（金）　志喜屋武当遺跡へ器材移動。

7月3日（月）　二俣B遺跡　包含層掘り下げ。志喜屋武当遺跡　重機にて表土除去。

7月4日（火）　二俣B遺跡　包含層掘り下げ。志喜屋武当遺跡　重機にて表土除去。

7月6日（木）　下田遺跡　清掃後写真撮影。志喜屋武当遺跡　A地点包含層掘り下げ。

7月7日（金）　志喜屋武当遺跡　A地点包含層掘り下げ。
7月10日（月）　志喜屋武当遺跡　重機にて表土除去。包含層掘り下げ。
7月11日（火）　志喜屋武当遺跡　A地点包含層掘り下げ。
7月12日（水）　志喜屋武当遺跡　A地点包含層，住居跡掘り下げ。下田遺跡　遺構検出状況，調査範囲図平板実測。
7月13日（木）　志喜屋武当遺跡　A地点包含層，住居跡掘り下げ。
7月14日（金）　志喜屋武当遺跡　A地点包含層，住居跡掘り下げ。
7月17日（月）　志喜屋武当遺跡　A地点包含層，住居跡掘り下げ。
7月18日（火）　志喜屋武当遺跡　A地点包含層，住居跡掘り下げ。
7月19日（水）　志喜屋武当遺跡　住居跡掘り下げ。A地点清掃後写真撮影。遺物取り上げ。
7月20日（木）　志喜屋武当遺跡住居跡実測。現地説明会。
8月1日（火）　志喜屋武当遺跡　住居跡実測。
8月2日（水）　志喜屋武当遺跡　住居跡実測。
8月3日（木）　志喜屋武当遺跡　住居跡実測。遺物取り上げ。
8月4日（金）　志喜屋武当遺跡　住居跡実測。遺物取り上げ。完掘状況写真撮影。器材片付け。

平成12年度　本調査（2次）
11月13日（月）　志喜屋武当遺跡C地点・D地点重機による表土剥ぎ。土地改良課と打ち合わせ。
11月14日（火）　雨のため作業中止。
11月15日（水）　C地点は水が溜まり調査できず。D地点，作業員による包含層掘り下げ。
11月16日（木）　D地点包含層掘り下げ。
11月17日（木）　D地点包含層掘り下げ。
11月20日（月）　C地点，D地点掘り下げ。午後，雨のため作業中止。
11月21日（火）　D地点の泥除去後，包含層掘り下げ。
11月22日（水）　C地点トレンチ内の水汲み，D地点包含層掘り下げ。
11月24日（金）　D地点包含層掘り下げ。
11月27日（月）　C地点，D地点包含層掘り下げ。
11月28日（火）　C地点包含層掘り下げ。D地点，拡張部分掘り下げ。
11月30日（木）　C地点清掃後，出土状況写真撮影。D地点清掃。
12月1日（金）　C地点遺物出土状況平板実測，写真撮影。D地点出土状況写真撮影。
12月4日（月）　C地点遺物出土状況平板実測。写真撮影。
12月5日（火）　器材片付け。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

志喜屋武当遺跡は，大島郡知名町大字住吉字志喜屋武当に位置する。

遺跡の所在する知名町は，鹿児島から南へ542㎞の沖永良部島にあり，和泊町と隣接し，東北に約32㎞を隔てて徳之島，南に約33㎞を隔てて与論島を，さらに60㎞を隔てて沖縄を望む位置にある。

気候は，亜熱帯モンスーン気候区に属し，四季を通じて温暖な島である。島を取り囲むように珊瑚礁が発達するが，特に南部海岸に顕著で，一方，北部海岸側では海食崖が連続してよく発達する。地質学的にみると，古生層を基盤とした第４紀琉球層群（隆起珊瑚礁）からなる比較的低平な島で，最高所の大山（標高246m）を取り巻くような形で数段の段丘が形成されている。また，大山を取り囲むような形でカルスト地形が発達し，ドリーネ（凹地）が数多く分布している。全島にわたって石灰岩に覆われているため，雨水は地下に浸透して段丘間の斜面下，ドリーネの底部，浸食の進んだ部分あるいは海岸付近に湧水・暗川となって現れ，地下には石灰岩洞穴を数多く形成している。これらの湧水・暗川（くらごう）は，河川の少ない沖永良部島にあっては，この水源が遺跡の分布，集落の立地に大きな関わりをもっている。

知名町の遺跡が考古学的研究の対象となったのは昭和32年，九学会連合奄美大島共同調査の考古班河口貞徳氏らによる住居貝塚（29）の発掘調査が最初で宇宿上層式・宇宿下層式土器や石器等のほかに石組住居跡が発見された。河口氏はその後瀬戸口望氏・本田道輝氏や鹿児島大学・地元高校生らと，昭和57，58，59年の三次にわたり中甫洞穴（64）の発掘調査を行った。調査の結果，縄文早・前期の新型式の土器，縄文時代の土壙墓及び人骨，南九州の弥生時代後期の土器等が出土し，沖永良部島の歴史が縄文時代前半に遡ることが判明した。

また，昭和57年，58年には，沖縄国際大学，鹿児島大学により神野貝塚（36），スセン當貝塚（37）の発掘調査が行われた。神野貝塚では，縄文時代前期～縄文時代後期の土器が層序よく出土した。これにより，従来不明であった南島縄文時代中期の土器に，面縄前庭式が該当することが判明した。これらは沖縄国際大学の高宮広衛氏により面縄前庭様式として整理・編年され，後期前半の土器と併せて縄文時代中期から後期にかけての土器編年が明らかにされつつある。また，スセン當貝塚では，五世紀代の新型式の土器が出土し，スセン當式土器と命名された。これら一連の調査は不明部分の多かった沖永良部島の先史時代の解明に大きな進歩をもたらした。

昭和60年・63年には，県営圃場整備事業に伴って，赤嶺原遺跡（62），前当遺跡（61）が発掘調査され，赤嶺原遺跡では，類須恵器，青磁，スクニージュと呼ばれる中世の排水路等が確認された。また，町単独事業として，町内の遺跡分布調査も実施された。

昭和62年に熊本大学の研究活動の一環として石原遺跡（56）が調査された。個人の畑地造成のいわゆる天地返しによる削平を受けて，遺物が多量に散布していた。石原遺跡では，縄文時代後期～縄文時代晩期の土器や貝製品等が出土した。平成４年には農業基盤整備事業にともなって浜須Ａ（24），浜須Ｂ（23）遺跡の調査も実施された。浜須Ｂ遺跡では沖永良部島で２例目となる縄文時代後期初頭の時期の住居跡が５基確認された。

今回の調査の中心の志喜屋武当遺跡は，知名町の西部で，海岸線から直線で約80m内陸に入り，標高約15mの畑地帯のなかに立地する。直下には珊瑚礁の発達した海岸が広がり南の方向には与

論・沖縄を望むことができる。また，東部１㎞には住吉貝塚が所在する。遺跡付近は，畑地が広がりサトウキビ・葉タバコ・グラジオラス・ジャガイモ等の農作物が栽培されている。

≪参考文献≫

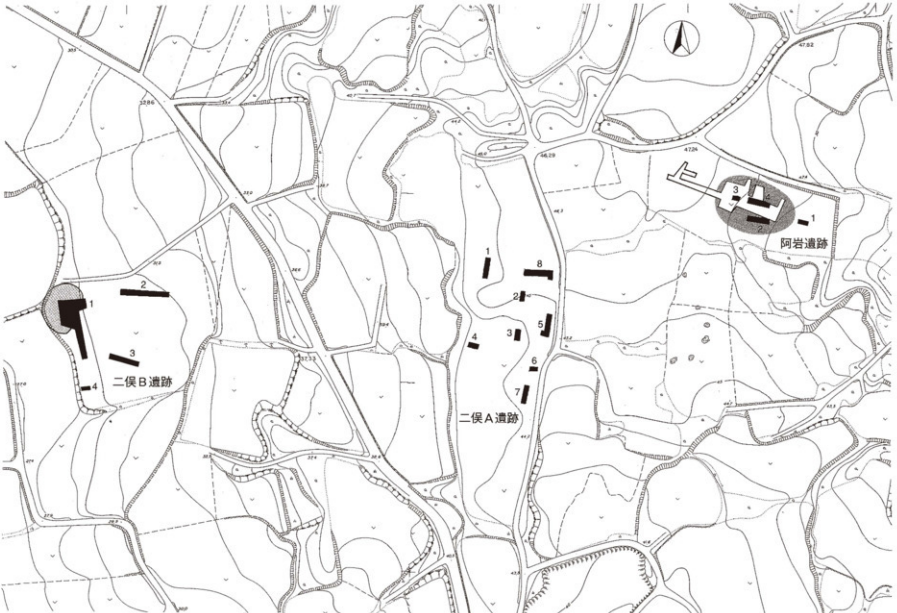
国分直一，河口貞徳，曽野寿彦，野口義麿，原口正三　1959
「沖永良部島住吉貝塚調査報告」『奄美　その自然と文化』日本学術会議
沖縄国際大学考古学研究室　1987『沖国大考古』第９号　沖縄国際大学考古学研究室
上村俊雄　1983　「沖永良部島の考古学的調査」『南日本文化』第16号　南日本文化研究所
上村俊雄・本田道輝　1984　「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『南西諸島の先史時代における考古学的基礎研究』鹿児島大学法文学部考古学研究室
熊本大学考古学研究室　1988　『石原遺跡』研究活動報告22　熊本大学考古学研究室
知名町教育委員会　1984　『中甫洞穴』　鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書
知名町教育委員会　1985　『赤嶺原遺跡』　鹿児島県大島郡知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）
知名町教育委員会　1986　『知名町埋蔵文化財分布調査概報』　知名町文化財報告書（５）
知名町教育委員会　1988　『前当遺跡』　知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）
知名町教育委員会　1993　『大当遺跡　浜須Ａ・Ｂ遺跡』　知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

第２図　周辺の遺跡

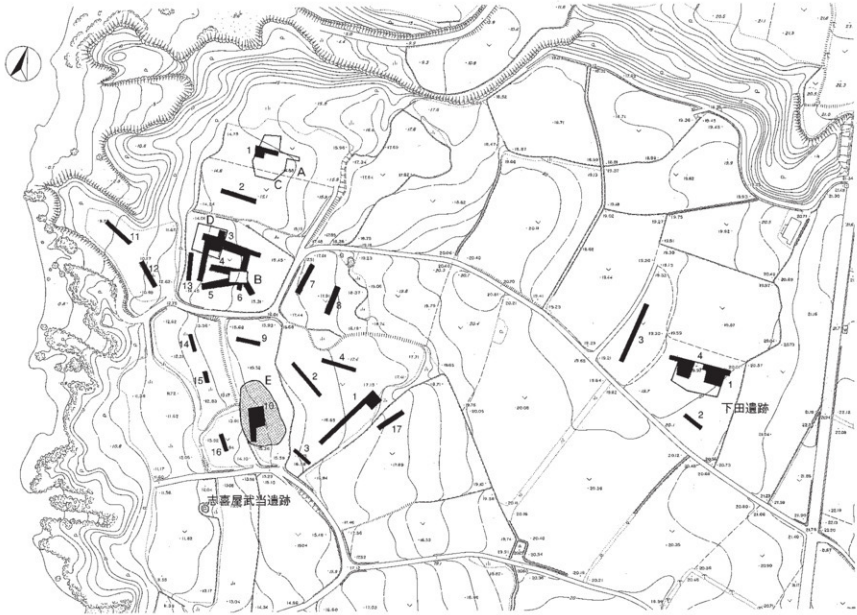
第１表　知名町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	志喜屋武当	住吉字志喜屋武当	台地	縄文		平成12年度発掘調査
2	ウロク畑A	正名字ウロク畑	台地		ふいご羽口・鉄滓	
3	下田	住吉字下田	台地	中世		平成12年度発掘調査
4	ウロク畑B	正名字ウロク畑	台地		土器片	
5	ウロク畑C	正名字ウロク畑	台地		土器片	
6	川仁堂B	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
7	川仁堂A	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
8	阿部窪	住吉字阿部窪	台地	縄文～中世		平成13年度確認調査
9	貝屋原	住吉字貝屋原	台地	縄文～中世		平成10年度分布調査
10	千間	正名字千間	台地	中世	類須恵器	
11	正名内間	正名字内間	台地	中世	類須恵器・白磁	昭和60年度分布調査
12	帯野	正名字帯野	台地		土器片	
13	池原	正名字池原	台地		類須恵器・青磁	確認調査
14	手殿	住吉字手殿	台地		青磁・染付	昭和60年度分布調査
15	志良辺堂	正名字志良辺堂	台地		弥生・中世	平成９年度発掘調査
16	黒平	正名字黒平	台地	縄文		平成８年度確認調査
17	伊舎良	正名字伊舎良	台地		土器片	
18	池原B	正名字池原	台地	縄文・中世		平成７年度確認調査
19	大平	正名字大平	台地	中世		平成13年度確認調査
20	二俣B	正名字二俣	台地	縄文・中世		平成12年度発掘調査
21	二俣A	正名字二俣	台地	縄文・中世		平成11年度確認調査
22	阿岩	正名字阿岩	台地	縄文		平成12年度発掘調査
23	浜須B	田皆字浜須	台地	縄文後期～弥生	土器片	平成４年度確認調査
24	浜須A	田皆字浜須	台地	古墳～歴史	土器片・類須恵器	平成４年度確認調査
25	曽根	田皆字曽根	台地	古墳	土器片・チャート	
26	田皆伊美畑	田皆字伊美畑	台地		磨製石斧	
27	内納当	住吉字内納当	台地	縄文・中世		平成９年度確認調査
28	友留	住吉字友留	平地		無文土器	昭和60年度分布調査
29	住吉貝塚	住吉字兼久	砂丘	縄文後期	土器(宇宿上層・下層式)	昭和32年九学会調査
30	木部蘭迫	住吉字木部蘭迫	台地		無文土器・青磁片	昭和60年度分布調査
31	昇竜洞	住吉字吉野平川	山腹	中世	人骨・管玉	
32	永良部洞	瀬利覚字スマン辻	山腹		類須恵器・獣骨	昭和60年度分布調査
33	大津勘フバド	大津勘字フバド	台地		類須恵器	昭和60年度分布調査
34	大津勘フーダトゥ	大津勘字フーダトゥ	台地		石斧	昭和60年度分布調査
35	水連洞	大津勘字蓮木俣	丘陵	中世	類須恵器	昭和60年度分布調査
36	神野貝塚	大津勘字神野	砂丘	縄文	土器(宝川下層式等)石器	昭和57･58年沖国大調査
37	スセン當貝塚	屋子母字スセン當	砂丘	古墳	土器(スセン當式)石器	昭和57年鹿大調査
38	屋子母セージマ古墳跡	屋子母字妻々	丘陵			
39	屋子母遺跡	屋子母字植村･上坂	丘陵		土器・石器	

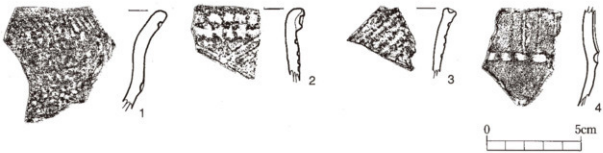
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
40	当ノ増遺跡	屋子母字当ノ増	砂土		土器・石器	昭和60年度分布調査
41	川春	屋子母字川春	砂土		青磁片	昭和60年度分布調査
42	泊り原	屋子母字泊り原	丘陵		無文土器	昭和60年度分布調査
43	浜倉	屋子母字源手名	平地			
44	塩津類ビ	屋子母字塩津類ビ	丘陵			昭和60年度分布調査
45	前兼久C	黒貫	台地	中世		平成９年度確認調査
46	屋窪	芦清良字屋窪	台地	縄文～中世		
47	前兼久	芦清良字兼久	台地	縄文～中世		
48	前兼久B	黒貫	台地	弥生・中世		平成８年度確認調査
49	高アタ子	黒貫	台地	縄文		平成10年度確認調査
50	芦清良前金久	芦清良字前金久	砂丘		類須恵器	昭和60年度分布調査
51	屋者琉球式墳墓	屋者字勝丸	平地			
52	川切	余多字川切	台地	縄文～中世		
53	栄長鳥	余多字栄長鳥	台地	縄文～中世		
54	イクサイヨー洞穴	余多字石嘉喜	洞穴	縄文～古墳	人骨・土器・貝輪	昭和60年度分布調査
55	砂田	余多字砂田	台地	縄文		平成６年度農政分布
56	石原遺跡	余多字石原	台地	縄文	土器・石器・貝器	昭和62年熊大発掘調査
57	本田	余多字本田	台地	縄文～中世		
58	下平川２	下平川	台地		類須恵器	
59	下平川３	下平川	台地		類須恵器	
60	下平川１	下平川	台地	中世	類須恵器	
61	前当	上平川字前当	台地	中世	類須恵器・鉄滓	昭和62年発掘調査
62	赤嶺原遺跡	赤嶺字赤嶺原	丘陵	縄文・歴史	土器・須恵器・青磁	昭和59年度確認調査
63	アーニマガヤ古墳跡	赤嶺字マガヤ	丘陵			
64	中甫洞穴	久志検字水窪	ドリーネ	縄文・弥生・歴史	土器(爪形文)石器・人骨	昭和57・58・59年発掘調査
65	花城洞穴	上平川字花城	洞穴			昭和60年度分布調査
66	上城跡	上城字次石	山麓			
67	西目国討兵衛佐居城跡	下城字先間	山麓			
68	新城花窪ニャート墓	新城	平地			
69	アンギム	下城字アンギム	台地		無文土器・類須恵器	



第3図　二俣A遺跡・二俣B遺跡・阿岩遺跡周辺地図及びトレンチ配置図



第4図　志喜屋武当遺跡・下田遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図



第５図　志喜屋武当遺跡表採土器

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　確認調査の概要

平成11年度の確認調査は，２週間の予定で，畑地帯総合整備事業第二知名西部地区において実施する予定で，当初，二俣Ａ遺跡，二俣Ｂ遺跡，大平遺跡の確認調査を実施する予定であった。その後担い手育成畑地帯総合整備事業住吉地区が事業認可となり，住吉地区で平成11年度に実施した分布調査において，新たに確認された下田遺跡と志喜屋武当遺跡についても，平成12年度の事業地区に入っていたため，急遽確認調査を実施してほしい旨の要望があった。そこで可能な限り対応することとしたが，９月の確認調査の時は，下田遺跡と志喜屋武当遺跡の一部はサトウキビが植えられており，トレンチの設定が困難であったために，１月に再度確認調査を実施することとした。なお大平遺跡については，事業の同意が得られず，調査は実施しなかった。調査方法は，分布調査で括られた範囲の内外に，任意にトレンチを設定し，基本的に重機を利用して，バケット幅で長いトレンチを設定する。その途中で，遺物が出土したり，遺構が検出された場合は，随意拡張して，その遺構のプラン・性格・時代，遺物の分布状況等の把握を行った。（第３図・第４図）

二俣Ａ遺跡

二俣Ａ遺跡は標高43ｍの高台にあり，平成７年度実施された分布調査で確認された。二俣Ａ遺跡は畑地表面に宇宿上層式を中心とする土器片や磨石等が散乱していた。幅1.8ｍで，長さ４ｍから17ｍの８本のトレンチ（122.4㎡）を設定した。１ｍを越える撹乱層があり，天地返しによって遺跡は破壊されたものと判断した。

二俣Ｂ遺跡

二俣Ｂ遺跡は，標高約30ｍの畑地にあり，長さ５～25ｍの５本のトレンチを設定して一部拡張して本調査も行い，最終的には294.6㎡の面積を掘り下げた。拡張部分については，次年度に再発掘することとした。畑地の中心部については，天地返しにより撹乱されていたが，畑地のもっとも低い部分については，撹乱を免れていた。耕作土の下約30㎝下に暗赤褐色の遺物包含層があった。約420㎡の範囲に包含層が残存する（第３図）。

阿岩遺跡

阿岩遺跡では，標高47ｍの周辺部では最も高所に立地する。４本のトレンチを設定し，64.8㎡の面積について調査した。深さ50㎝から１ｍの深さに西側に傾斜して包含層が存在する。また掘立柱

建物跡の柱跡と考えられるピットを検出した。遺跡範囲は第３図の約1,700㎡とした。平成12年度の本調査時に遺構検出を中心に行うこととした。

志喜屋武当遺跡

志喜屋武当遺跡は海岸近くの隆起石灰岩の標高15ｍの台地上にあり，北側に谷が入り，東側にドリーネがあり，地下水が湧める。平成11年度に17本のトレンチを設定し，472㎡の面積を調査した。平成12年１月には前年度未調査の畑地について４本のトレンチで197㎡を調査した。その結果，北側では表土から１ｍ弱の深さで縄文時代前期相当の条痕文土器が出土し（Ａ地点およびＣ地点），中央部で住居跡の可能性のある土坑１基（Ｂ地点）と掘立柱建物跡の柱跡と考えられるピット群を検出し（Ｅ地点），平成12年度の本調査時にＢ地点の海岸よりの西側の地点に包含層残存を確認しており（Ｄ地点），それぞれ地点を別にして４カ所の1,400㎡の範囲に遺跡を確認した。

下田遺跡

下田遺跡は標高19ｍの石灰岩台地上にあり，平成12年１月に４本のトレンチの158㎡について調査した。時期不明の掘立柱建物跡の考えられるピット群を検出し，約1,300㎡の範囲に遺構の存在する可能性がある。

第２節　本発掘調査の概要

確認調査の結果，志喜屋武当遺跡・下田遺跡・二俣Ｂ遺跡・阿岩遺跡について本調査を実施することとなった。志喜屋武当遺跡と下田遺跡を中心とする本調査は，平成11年度確認調査に基づき，平成12年７月３日～８月４日，平成12年11月13日～12月５日の２次にわたり実施し，対象面積は約1,150㎡であった。遺跡地は，ユリ・グラジオラスの球根が栽培されており，それら農作物の収穫後調査を開始した。

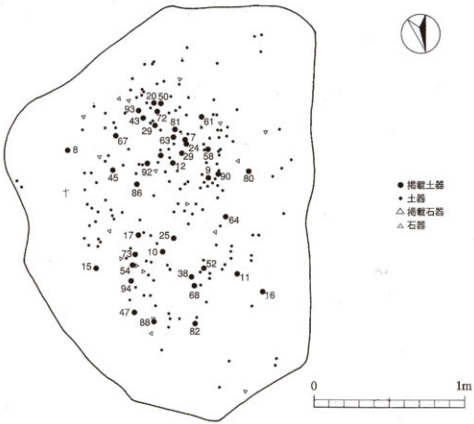
志喜屋武当遺跡の遺跡範囲は，隣接する２筆の畑にまたがっており，緩やかに西側に傾斜し，海岸に近い標高14ｍ～15ｍの隆起珊瑚礁の台地にある。一次調査では北側をＡ地点，南側をＢ地点として，約800㎡の調査を実施した。

Ａ地点の調査では，確認調査トレンチをもとに重機による表土除去後，人力による掘り下げを行った。その結果，表土から約90㎝で暗褐色を呈する縄文時代前期の包含層が確認でき，土器及び石器が出土した。

Ｂ地点の調査は，確認調査に住居跡の可能性にある土坑が確認されていたため，重機による表土除去後，確認調査時に土坑の埋土を掘り下げた先行トレンチを参考にしながら遺構全体の検出，人力による掘り下げを行った。焼土，土器片，炭化物等を多量に含む埋土で，随時遺物を取り上げながら掘り下げた。床面近くの遺物の出土状況，焼土の平面的な分布状況などから，縄文時代の住居跡であることが判明した。

二次調査では，Ａ地点の南側，Ｂ地点の海側をそれぞれ，Ｃ地点，Ｄ地点とし約350㎡の調査を実施した。Ｃ地点では，縄文時代前期の包含層，Ｄ地点では縄文時代後期の包含層を確認した。調査対象区域外の畑地では，すでに畑地帯総合整備事業に伴う工事が開始されていた。

下田遺跡・二俣Ｂ遺跡・阿岩遺跡については，重機で表土をはぎ遺跡範囲を確定した後に調査を行った。二俣Ｂ遺跡については，包含層発掘を中心に，下田遺跡・阿岩遺跡については，掘立柱建



第６図　志喜屋武当遺跡住居跡遺物出土状況

物跡の柱穴と考えられるピット検出を中心に調査を行った。

第３節　志喜屋武当遺跡の調査

本遺跡の標準的な土層は，Ⅰ層が盛土・旧耕作土，Ⅱ層が明褐色粘質土，Ⅲ層が暗褐色土の遺物含有層，Ⅳ層が明褐色土の基盤層である。土器は，A地点・B地点で多く出土し，文様等からⅠ～Ⅲ類に分類した。

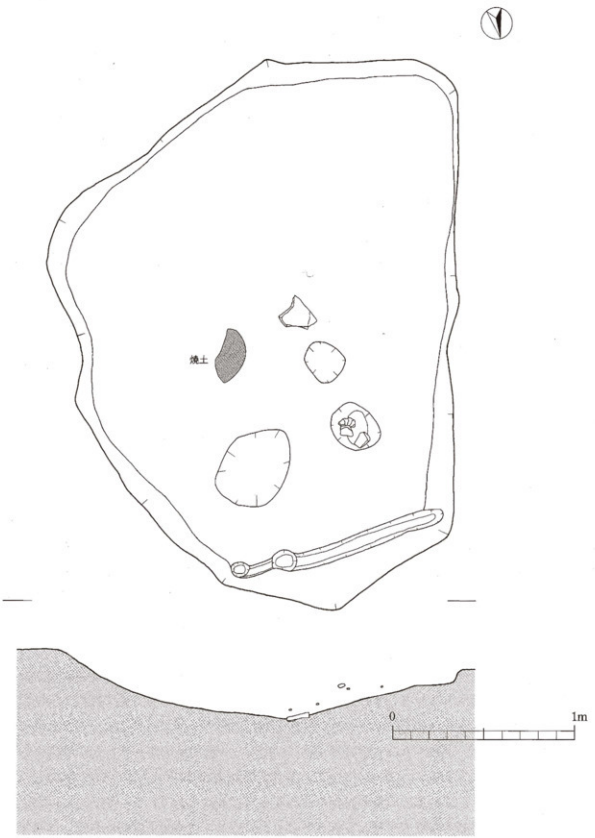
1　B地点住居跡の調査

（1）住居跡

B地点の包含層は削平されており，住居跡は基盤層である明赤褐色層で検出された。西側壁面は壁高が８㎝程でそこから中央部まで緩やかに落ち込む。検出面から中央部の最も落ち込んだ部分までは深さ40㎝程度である。検出面で径約60㎝，中央部床面付近で25㎝×15㎝の範囲で焼土が検出された。北側の壁面に沿って浅い掘り込みも検出された。北側の窪み部分からは胴部片がまとまったかたちで出土し，中央部床面付近から出土した口縁部と接合できた。住居跡の遺物出土状況は第６図であるが，埋土には，多量の焼土，土器片，炭化物等を含んでいた。土器については細分したが，床面近くに大破片で数個体まとまって出土した。埋土からも有文の破片が出土しているが，分類に

第７図　志喜屋武当遺跡住居跡床面遺物出土状況

もあるように時期幅はあまりないものと考えられる。石器は住居跡からは第７図の出土状況にあるように石皿の破片と磨石・凹石が出土している。石皿は砂岩で，完形品でなく，一部に磨跡が伺われるが，全形の復元は困難である。磨石・凹石は砂岩で，長軸9.8㎝×短軸8.2㎝の隅丸長方形で，重さ689gで，４面に敲打痕がつくものである。表裏２面は磨面で，中心部が3.4～3.6㎝の径で５㎜ほど穿たれ凹面をなしている。石斧の基部や一部が３点ほど出土している。埋土には砂岩の熱破砕礫，緑片泥岩の薄い剥片石器も見受けられる。これらについては図化しなかったが，住居跡内での使用が考えられる。床面近くでの出土状況により，遺物は同時代の一括遺物ととらえられる。焼土面の形成からは，最低２時期の使用がわかる。



第８図　志喜屋武当遺跡住居跡完掘状況

（2）遺　物

土　器

Ⅰ類

条痕文を施す土器で，器壁が厚い土器である。住居跡からの出土はみられない。

Ⅱ類

突帯・刺突・沈線で文様が構成されるものをⅡ類とした。文様の組み合わせにより3類に細分した。

Ⅱａ類

口縁部に突帯が廻り，突帯上に斜沈線・連続刺突等が施される。胴部には，鋸歯状，綾杉状の文様が施される。平口縁と波状口縁があり，平口縁の口唇部には，リボン状・山形の突起が付けられる。（5・8・9・10・12・15・16・17・18）

5は，大型の土器で，口縁部がやや外反し，なだらかに胴部に移行する。口唇部には，リボン状の突起をもつ。頸部から胴部にかけて，4本又は5本を1単位とした沈線がV字状に施される。他のⅡａ類の文様の大部分が綾杉状の沈線であるのに対し，5はV字状に沈線が施される例外的な個体である。8・9・10・15・16・17・18はいずれも口縁部に沈線・刺突が，胴部には沈線が綾杉状に施される。胎土・焼成・施文とも5に比べ良好である。8・17は山形の突起部分で頂部で16は，8・17同様胴部に縦位の沈線が確認できる。口唇部は平坦面をなし刺突が施される。12は，突起部分であるが，胴部には細沈線が施される，8・17のような胴部の縦位沈線はみられない。

Ⅱｂ類

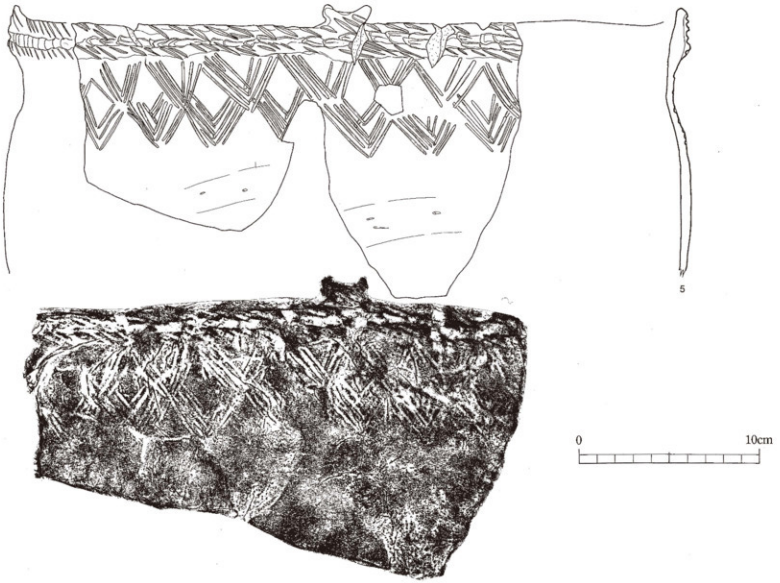
口縁部，頸部に突帯が廻り，突帯上に刺突を施すもの。胴部には沈線が施される。（6・7・1・3・14・20・21・24・25・29・30・31・32・46・49）

7は，口縁部がやや外反し，頸部で強く屈曲し，胴が張るタイプである。口縁部と頸部に突帯が廻り，口縁部，胴部に沈線が施される。6は，口縁部に斜沈線が施され，頸部に突帯が一条廻る。口唇部にはV字の抉りの入った突起を持つ。胴部は，沈線が綾杉状に施されるが，突起下位には縦位沈線が確認できる。13は口縁部に刺突が施され，6と同様に口唇部に突起を持つ。14は，左下方向への斜沈線が確認できる。20は，口縁部，頸部突帯に刺突が施される。胴部には左下方向への沈線がみられる。14・28，30・31は同一個体だと思われる。49は，頸部の破片である。刺突の施された突帯が一条廻る。突帯の上下にはV字状の沈線が施される。46は，49と同一個体だと思われる。

Ⅱｃ類

沈線のみで文様を構成するもの。（34・35・37・39・40・43・44・45）

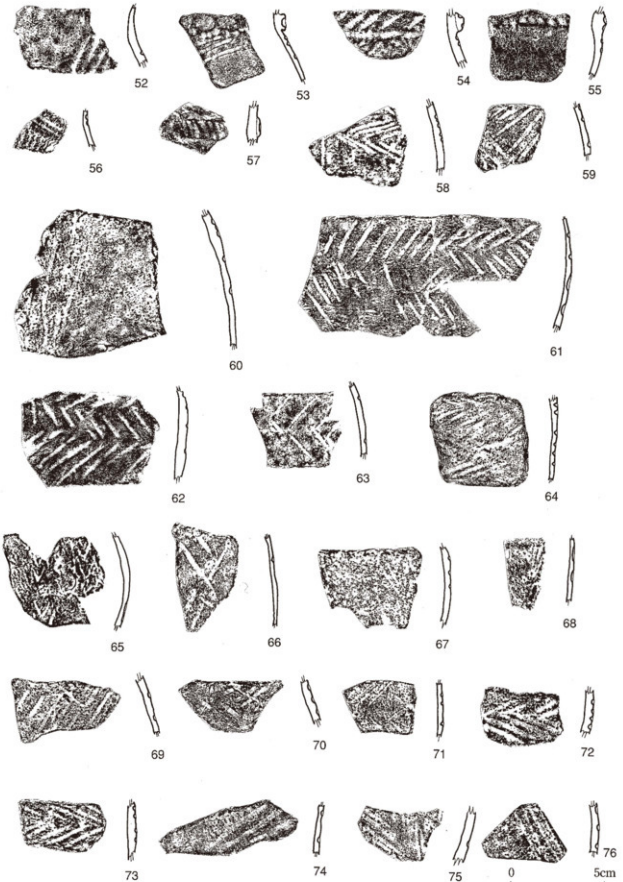
34・35・37・40・43・44は口縁部突帯に斜沈線，頸部・胴部に綾杉状の沈線が施される。45は，口縁部が外反し，肩部を形成する。40・43の頸部には，縦位沈線が確認できることから，頸部の2カ所または，4カ所に同様の沈線が施されると思われる。



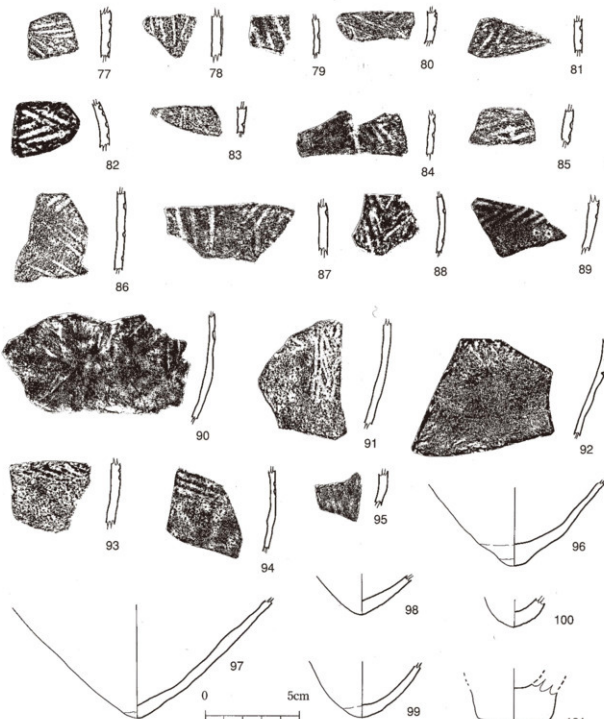
第９図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（１）

第10図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（2）

第11図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（3）



第12図　志賀屋武当遺跡住居跡出土土器（4）



第13図　志喜屋武当遺跡住居跡出土土器（5）

Ⅱ類胴部

（47・48・50～56・58～95）

92は，V字条の文様が確認できる。5と同一個体と考えられる。

91は，縦位沈線の間に斜位の沈線が施されている。51・64・72・77・82は綾形状の文様が施されている。Ⅱa類の胴部と考えられる。60は縦位沈線が三条施されている。

Ⅲ類

面縄前庭式に該当する一群である。いずれも小片である。（19・22・23・26・27・33・57）

19・23・33・42は口縁部に突帯が貼り付けられ突帯上に沈線が施される。42は突帯上に鋸歯状沈線，胴部には右下方向の斜沈線が確認できる。26・27は突帯上に半裁竹管状工具による連続刺突がみられる。54は頸部突帯部分で突帯上に斜沈線，胴部に左下方向の斜沈線が確認できる。

底部

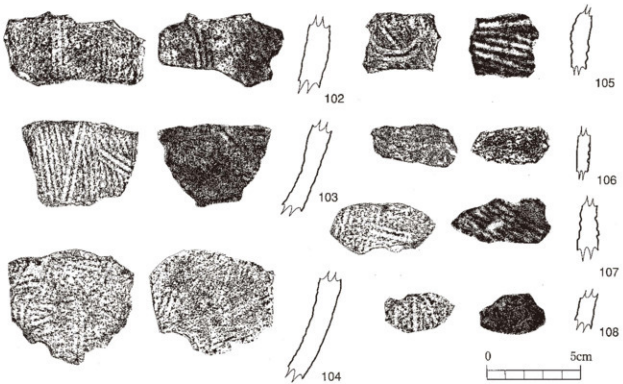
96は乳房状尖底。97・98は尖底。99・100は乳房状に近く，くびれ部をもつ丸底である。いずれもⅡ類の底部だと思われる。101は平底である。

第14図　志賀屋武当遺跡Ａ地点遺物出土状況

2　Ａ地点の調査

（1）出土状況・層位

Ａ地点はＢ地点の北側に隣接する畑に位置し，標高約15ｍである。調査は，平成11年度の確認調査で遺物包含層が確認されていた１Ｔを拡張し包含層の広がりをおった。調査区中央部に包含層の残存がみられた。Ａ地点は四方から中央部にむかってなだからに落ち込む窪地状の場所に遺物が堆積したものと考えられる。遺物は，貝殻条痕文の施された縄文時代前期相当の厚手の土器と，チャート製の石器等が炭化物を含んだ暗褐色層とその下の黄褐色層から出土した。貝殻条痕文土器の出土は中甫洞穴，神野貝塚に続き３例目である。



第15図　志喜屋武当遺跡Ａ地点出土土器

（2）遺　物

Ⅰ類

内外面に条痕が施される。

（102～108）

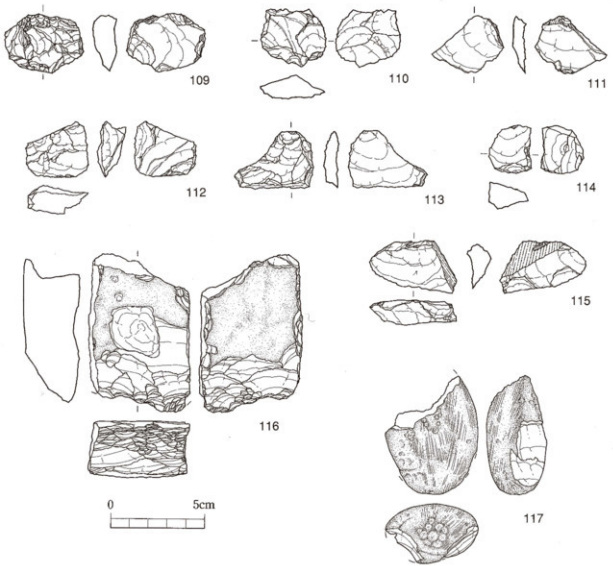
いずれも胴部片であるが中甫洞穴，神野貝塚の出土例から，器形は底部から口縁部にかけて直線的に開き最大径が口縁部にくる深鉢型で，底部は尖底あるいは丸底と考えられる。

外面の条痕は，102・107・108が縦方向，103・10が斜め方向，106が縦方向と横方向である。105・106は表面の磨滅が激しい。内面の条痕は，102が縦方向，102が横方向，106・107が斜め方向である。色調は暗赤褐色を呈し，厚さは，１㎝ほどで胎土は非常に脆い。

Ａ地点石器

チャートの剥片・チップを中心に，砂岩の磨石片などが出土した。チャートは薄緑色で結晶質が高いもの，白色に黒い筋のもの，青灰色で石脈が多いものなどがある。

109～115はチャートの剥片及び剥片石器である。石材のせいか不定形な剥片を剥出する。それぞれにかすかにリタッチや使用痕跡が伺われるものを掲載した。109は打瘤を取り，周縁にリタッチがみられる。スクレーパーの可能性がある。116は礫面に敲打による凹みがある。一方の短い側縁部に敲打によると思われる剥離が顕著である。上部分がおれているが，楔的な機能も考えられる。117は砂岩の円礫で，磨りによる擦痕がみられ，先端部に敲打痕がある。

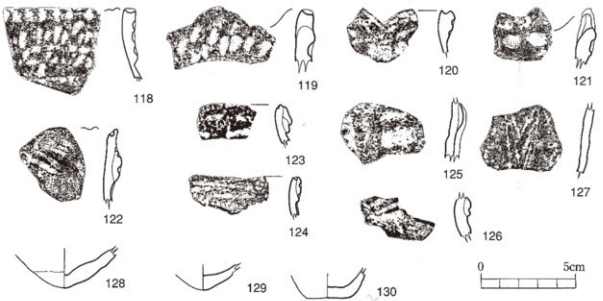


第16図　志喜屋武当遺跡Ａ地点出土石器

3　Ｃ地点の調査（Ａ地点の拡張）

Ｃ地点はＡ地点を南側へ拡張した部分で平成13年11月13日～平成13年12月５日まで調査を実施した。調査は，Ａ地点南壁を拡張し，Ａ地点から続く包含層の広がりをおった。南側に約６ｍ拡張した部分で基盤の石灰岩が現れたため，その部分までが包含層が残存する範囲であると判断し，約60㎡を調査した。包含層からは，土器片・石器等が約30点出土したが，土器はいずれも無文の胴部細片であり図化できるものはなかった。基本的にはＡ地点と同じ時期の遺物である。明らかに石器と認められる１点を図化した。

第17図　志喜屋武当遺跡Ｄ地点遺物出土状況



第18図　志賀屋武当遺跡Ｄ地点出土土器

4　Ｄ地点の調査

（1）出土状況・層位

Ｄ地点はＢ地点より西側で海側よりの標高14ｍの地点である。重機による表土除去を行い，その後，人力による掘り下げを行った。Ｂ地点よりの東側は包含層が削平されており，北西の海側部分に暗褐色の包含層の残存が認められた。遺物は縄文時代後期の土器片や石器等を中心とするが，時期としては弥生時代までの遺物が混在しており青磁片も出土しており，ドリーネ状の地形へ流れ込んだ可能性が強い。

（2）遺　物

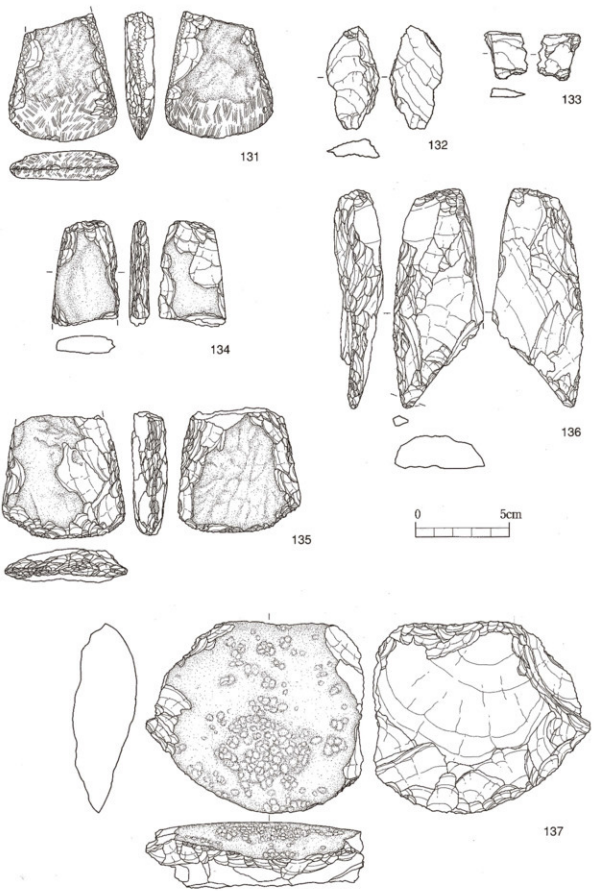
土器

Ⅱｃ類

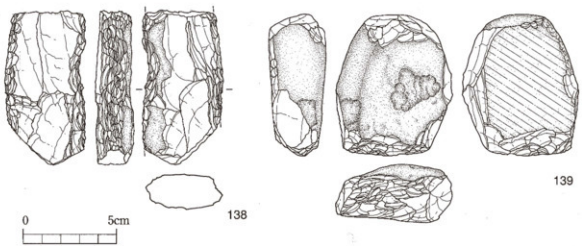
122の１点のみで，口縁部の突帯上に斜沈線，頸部には縦位の沈線が施される。

その他の土器

118は，口縁部が肥厚するもので，口縁部に横方向の刺突が３条施される。肥厚部の段は明瞭である。119は山形の突起部分で，文様構成は118と同様だと思われる。118・119いずれも口唇部に刺突が施される。120は，Ｕ字状の抉りの入った突起部分で，斜方向の沈線が施されている。121も，突起部分で，口縁部に刺突が施される。123は，口縁部に突帯が廻り，さらにその上に斜め方向の短突帯が貼り付けられる。125も縦方向に短突帯が貼り付けられる。124は突帯上に２条の沈線が施される。126は胴部片で，突帯上と胴部に沈線が施される。127も胴部片で，Ｖ字状の沈線が施される。128～130は底部で，128・129は丸底，130は平底である。



第19図　志喜屋武当遺跡C・D地点出土石器



第20図　志喜屋武当遺跡Ｄ地点出土石器

Ｃ・Ｄ地点石器

131は磨製石斧である，基部が欠損している。側面に細かな敲打痕があり，再利用された可能性が高い。132・133はチャートの剥片である。132は使用痕跡が認められる。134・135・136は石斧の基部である。136は先端を利用した可能性もある。137は礫器で，礫の背面には敲打痕跡も見受けられる。敲石・凹石を礫器として使用したものである。138も石斧の中間部分である。整形剥離が両側縁に施される。139は磨石・凹石であるが，片面が石脈に沿って剥落している。

第４節　その他遺跡の調査

この地域の標準的土層は，Ⅰ層が盛土・旧耕作土，Ⅱ層が，明褐色粘土，Ⅲ層が暗褐色で遺物包含層，Ⅳ層が，明赤褐色で基盤層である。

1　阿岩遺跡

阿岩遺跡は，標高約47ｍの隆起珊瑚台地に位置する。調査は，平成13年６月12日～21日まで実施した。調査面積は，約500㎡であった。

調査は，重機を使い遺物の有無を確認しながら慎重に掘り下げを行った。若干残存していた包含層からは，カムイヤキ，土器片などが出土した。遺構は，赤褐色層上面で18基のピットが確認された（第24図）。包含層からカムイヤキが出土していることから中世の柱穴とも考えられたが，建物として復元するには至らなかった。

2　二俣Ｂ遺跡

二俣Ｂ遺跡は，阿岩遺跡の調査終了後に引き続き行った。二俣Ｂ遺跡は，標高30ｍの西側に緩やかに傾斜する台地上に位置し，阿岩遺跡とは直線距離で約300ｍである。調査対象となった畑の南側の地区ではすでに土地改良事業が実施されていた。

調査は，11年度の確認調査で遺物包含層が確認されていた１Ｔ周辺を重機を使い表土除去後，人力による掘り下げを行った。西側部分は石灰岩が混ざった状態で撹乱されていた。西側に隣接する畑との境界は約３ｍ程の段差で巨大な石灰岩が人工的に積まれており，このときの工事により撹乱されたものと思われる。調査実施面積は，350㎡であった。調査の結果，土器片・石器等が出土したが，口縁部や文様の施されたものは少なく，磨滅の激しいものが多かった。これらの状況から窪地に流れ込み堆積したものと考えられる（第21図）。

（１）遺　物

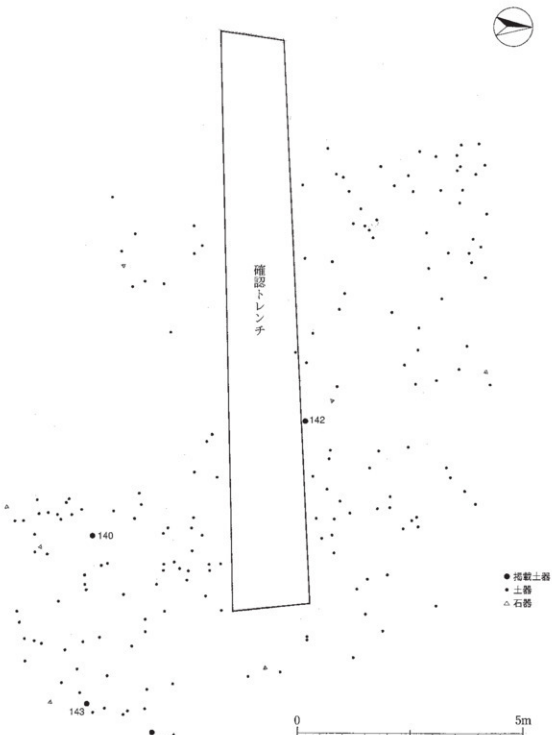
遺物は183点出土したが，そのうち口縁部や文様が施されている土器４点を図化した。

140は，口縁部に突帯を貼り付け，刺突を施す。頸部には，斜沈線が施される。141は，口縁部断面が蒲鉾状を呈し，頸部に斜沈線が施される。宇宿上層式に該当すると思われる。142は胴部片で横方向への刺突と沈線が施行される。143は，外面にいわゆる外耳といわれる突帯が貼り付けられている。色調は赤褐色で胎土，焼成とも良好である。

3　下田遺跡

下田遺跡の調査は，二俣Ｂ遺跡の調査に引き続き平成13年７月６日～平成13年７月12日まで実施した。下田遺跡は志喜屋武当遺跡の東250ｍの畑に位置する。

平成11年度の確認調査で，ピットが確認されていた１Ｔ，４Ｔを拡張し，遺構の広がりを確認した。まず，重機を使い，表土除去後，作業員による遺構検出作業を行った調査面積は約400㎡であった。



第21図　二俣Ｂ遺跡遺物出土状況

第22図　二俣B遺跡出土土器

調査の結果，遺物包含層は確認できず，赤褐色層上面でピットが42基検出された。遺構時期等を判断する遺物が出土していないため時期，性格不明である。(第23図)

第2表　石器計測表

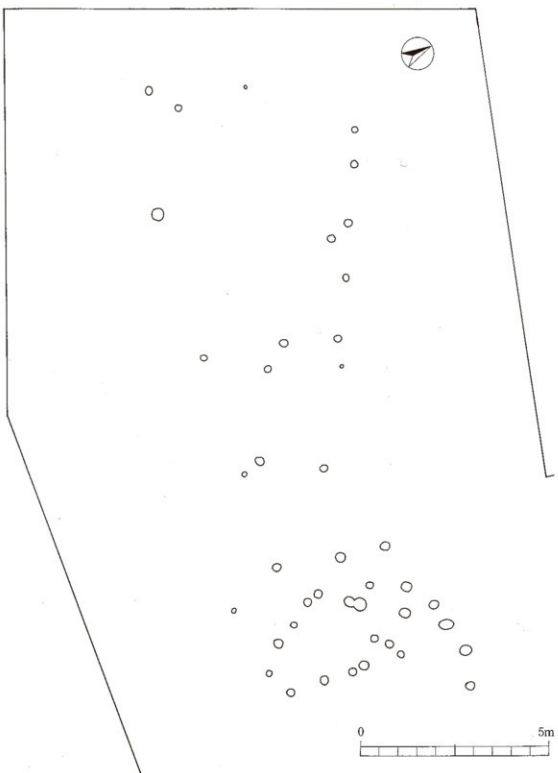
挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第16図	109	使用痕剥片	A区		3.4	3.9	1.6	19.97	チャート	
	110	剥片	A区		3.1	3.5	1.2	12.49	チャート	
	111	使用痕剥片	A区		3.8	3.1	0.7	6.8	チャート	
	112	使用痕剥片	A区		3.3	3.0	1.3	11.9	チャート	
	113	剥片	A区		3.0	4.2	0.7	9.27	チャート	
	114	剥片	A区		2.5	2.3	1.4	8.54	チャート	
	115	剥片	A区		4.6	2.8	1.3	12.47	チャート	
	116	凹石	A区		8.35	5.4	—	208.24	頁岩	
	117	敲石・磨石	A区		6.2	4.9	—	88.61	砂岩	
第19図	131	磨製石斧(刃部)	C区		6.7	5.7	—	88.94	安山岩	
	132	使用痕剥片	D区		5.5	2.8	0.9	14.93	チャート	
	133	剥片	D区		2.5	2.4	0.4	3.8	チャート	
	134	石斧(基部)	D区		5.55	3.55	—	29.01	緑片泥岩	
	135	石斧(刃部)	D区		6.5	6.45	—	106.74	頁岩	
	136	石斧(基部)	D区		11.55	4.8	—	126.44	頁岩	先端に使用痕
	137	敲石・礫器	D区		10.1	11.5	—	502	砂岩	
第20図	138	石斧(基部)	D区		8.2	4.25	—	89.67	砂岩	
	139	凹石・敲石	D区		7.5	6.15	—	182.34	砂岩	

第３表　土器観察表（1）

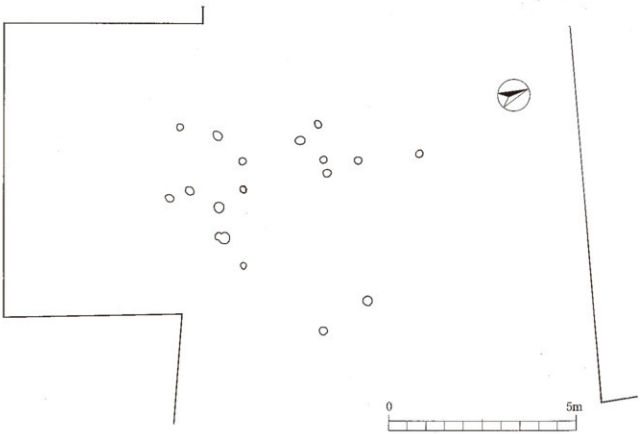
遺物番号	注記番号	胎土					焼成	色調		調整・文様	
		石英	長石	角閃石	金雲母	砂礫		外	内	外器面	内器面
1	sil ヒ	◎			○		○	赤褐色	赤褐色	斜沈線・ナデ	ナデ
2	sil ヒ				◎	◎		褐　色	褐　色	連続刺突・沈線・ナデ	ナデ
3	sil ヒ	○	○		○	○		淡褐色	淡褐色	斜沈線・ナデ	ナデ
4	sil ヒ	○	○		◎	○	○	褐　色	褐　色	斜沈線・ナデ	ナデ
5	sil ゴウ252	◎	○		○	◎		褐　色	褐　色	連続刺突・沈線・ナデ	ナデ
6	sil ゴウ248	○	○		○	○	○	暗褐色	暗褐色	刺突・沈線・ナデ	ナデ
7	sil ゴウ239	○	○		○	○		赤褐色	赤褐色	斜沈線	ナデ
8	sil ゴウ2	○	○		○	○	○	暗褐色	暗褐色	連続刺突・沈線・ナデ	ナデ
9	sil ゴウ105/28	◎	○			○		暗褐色	暗褐色	連続刺突・沈線	ナデ
10	sil ゴウ180	○	○		○	◎		赤褐色	赤褐色	連続刺突・沈線	ナデ
11	sil ゴウ15	○	○		○	○		赤褐色	赤褐色	沈線	
12	sil ゴウ134	○	○		○	○		黒褐色	黒褐色	連続刺突・沈線	ナデ
13	sil ゴウ301	◎	○		△	◎		赤褐色	赤褐色	刺突	ナデ
14	sil ゴウマイ	○	○		○	◎		暗褐色	暗褐色	刺突・沈線	ナデ
15	sil ゴウ95・3	◎	○		△	○	○	淡褐色	暗褐色	連続刺突・沈線	ナデ
16	sil ゴウ16	◎	○		○	○		褐　色	暗灰色	刺突・沈線	ナデ
17	sil ゴウ27	○	○		○			赤褐色	暗褐色	連続刺突・沈線	ナデ
18	sil ゴウマイ	○	○		○			褐　色	褐　色	刺突	ナデ
19	sil ゴウマイ	○	○		○			淡褐色	淡褐色	沈線	
20	sil ゴウ199	○	○			○		暗褐色	暗褐色	連続刺突・沈線	ナデ
21	sil ゴウ136	○	○		○	○		淡褐色	淡褐色	刺突・沈線	ナデ
22	sil ゴウ61	○	○					褐　色	褐　色	刺突・沈線	ナデ
23		◎	○		○	◎		暗褐色	暗褐色	沈線	
24	sil ゴウ156	◎	○		○	○	○	赤褐色	赤褐色	刺突	ナデ
25	sil ゴウ45	◎	○		△	○		褐　色	褐　色	刺突	ナデ
26	sil ゴウ289	◎	○		△	○		暗褐色	暗褐色	刺突・沈線	ナデ
27	sil ゴウマイ	◎	○		○			淡褐色	淡褐色	沈線	
28	sil ゴウマイ	○	○		△			暗褐色	暗褐色	刺突	
29	sil166	○	○		△			褐　色	褐　色		
30		○	○		△		○	褐　色	褐　色	刺突	ナデ
31		○	○		△		○	褐　色	褐　色	刺突	ナデ
32	sil ゴウマイ	○	○		○	○		褐　色	褐　色	連続刺突	
33	sil295	○	○			△		褐　色	褐　色	沈線	
34		◎	○		○	○		黒褐色	黒褐色	沈線	ナデ
35	sil ゴウマイ	◎	○		○	○		黒褐色	黒褐色	沈線	ナデ
36	sil ゴウマイ	○				◎		淡褐色	淡褐色	沈線	ナデ
37	sil ゴウマイ	◎	○		○			黒　色	黒　色	沈線	ナデ
38	sil189	◎	○		△	◎		淡褐色	淡褐色	沈線	沈線
39	sil220	○	○		○			淡褐色	淡褐色	沈線	工具ナデ
40		○	○					黒褐色	黒褐色	沈線	ナデ
41	sil ゴウ	○	○			○		淡褐色	淡褐色	沈線	ナデ
42	sil ゴウマイ	○	○					赤褐色	赤褐色	沈線	ナデ
43	sil163	◎	○		○			暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
44	sil ゴウ245	◎	○		○			暗褐色	暗褐色	連続刺突・沈線	ナデ
45	sil168	◎	○			○		黒褐色	黒褐色	沈線	
46	sil ゴウマイ	○	○		△			褐　色	褐　色	刺突・沈線	ナデ
47	sil155	○	○		△			暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
48	sil ゴウマイ	◎	○		△			淡褐色	淡褐色	沈線	ナデ
49	sil ゴウ288	◎	○			◎		赤褐色	赤褐色	連続刺突・沈線	ナデ（横）
50	sil ゴウ33	◎	○		○	◎		淡褐色	淡褐色	沈線	ナデ
51	sil ゴウマイ	◎	○		△	○		褐　色	褐　色	沈線	ナデ
52	sil ゴウ17	◎	○			○		暗褐色	黒　色	沈線	ナデ
53	sil ゴウ	◎	○		△	○		暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
54	sil ゴウマイ	○	○		員	○		淡褐色	淡褐色	連続刺突・沈線	ナデ
55	sil ゴウ248	◎	○		○	○		赤褐色	赤褐色	刺突・沈線	ナデ
56	sil ゴウマイ	○	○		○	○		黒褐色	黒褐色	沈線	ナデ
57	sil ゴウ294	○	○			○	△	淡褐色	淡褐色	沈線	
58	sil ゴウ106	○	○		△			暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
59	sil ゴウ249	◎	○		○			褐　色	褐　色	沈線・ナデ	ナデ
60	sil ゴウマイ	◎	○			○		暗褐色	暗褐色	沈線・ナデ	条痕ナデ消し
61	sil ゴウ37	◎	○		○	○		暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
62	sil ゴウ246	◎	○		○	○		暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
63	sil ゴウ237	○	○			○		褐　色	褐　色	沈線・ナデ	

第3表　土器観察表（2）

遺物番号	注記番号	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 金雲母	胎土 砂礫	焼成	色調 外	色調 内	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面
64	si1ゴウ100・103	◎	○		△	◎		赤褐色	赤褐色	沈線	ナデ
65	si1ゴウ282	○	○					暗褐色	暗褐色	沈線・工具ナデ	工具ナデ
66	si1ゴウ248	○	○		○	○		暗褐色	暗褐色	沈線・ナデ	ナデ
67	si1ゴウ3	◎	○		△	○		赤褐色	赤褐色	沈線	ナデ(横)
68	si1ゴウ18	○	○		△			暗褐色	暗褐色	沈線	工具ナデ
69	si1ゴウ135	○	○		○			暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
70	si1ゴウ74	○	○					褐　色	褐　色	沈線	
71	si1ゴウ277	◎	○		△	○		暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
72	si1ゴウ119	◎	○		○			暗褐色	暗褐色	沈線	
73	si1ゴウ47	◎	○		○	◎		暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
74	si1ゴウマイ	○	○		○			暗褐色	暗褐色	沈線	
75	si1ゴウマイ	◎	○					褐　色	暗褐色	沈線	ナデ
76	si1ゴウマイ	◎	○		○	○		赤褐色	赤褐色	沈線	ナデ
77	si1ゴウ205	◎	○			○		暗褐色	暗褐色	沈線	
78	si1ゴウ74	○	○		○	○		赤褐色	赤褐色	沈線・ナデ	ナデ
79	si1ゴウ	◎	○		○	○		暗褐色	暗褐色	沈線	
80	si1ゴウ40	◎	○		○	○		暗褐色	暗褐色	沈線・ナデ	
81	si1ゴウマイ	○	○		○	○		暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
82	si1ゴウ54	◎	○		○	○		暗褐色	暗褐色	沈線・ナデ	ナデ
83	si1ゴウ286	○	○			○		褐　色	黒褐色	沈線	
84	si1ゴウ44	◎	○		△	◎		黒褐色	黒褐色	沈線	ナデ
85	si1ゴウマイ	◎	○		△	○		黒褐色	黒褐色	沈線	ナデ
86	si1ゴウ62	◎	○		○	◎		赤褐色	赤褐色	沈線	工具ナデ
87	si1ゴウ64	◎	○		○	○		赤褐色	暗褐色	沈線	ナデ
88	si1ゴウ152	◎	○		△	○		黒褐色	赤褐色	沈線	ナデ
89	si1ゴウマイ	○	○		○			褐　色	褐　色	沈線	ナデ
90	si1ゴウ221	◎	○			○		赤褐色	赤褐色	沈線	
91	si1ゴウ311	○	○		○	△	○	褐　色	褐　色	沈線	ナデ
92	si1ゴウ261	◎	○		○	○		茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ
93	si1ゴウ6	◎	○		○	○		淡褐色	淡褐色	沈線	
94	si1ゴウ93	◎	○		△	○		暗褐色	暗褐色	沈線	
95	si1ゴウマイ	○	○		△	○		暗褐色	暗褐色	沈線	ナデ
96	si1ゴウ284	◎	○		△	◎		赤褐色	赤褐色	ナデ	
97	si1ゴウ242	◎	○			○		暗褐色	暗褐色		
98	si1ゴウ276	◎	○		○	◎		赤褐色	暗褐色		
99	si1ゴウ269	○	○		△	○		褐　色	赤褐色		
100	si1ゴウマイ	◎	○			○		赤褐色	赤褐色		
101	si1ゴウ252	○	○			○		赤褐色	赤褐色		
102	siA203	◎			○	◎		暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	ナデ
103	siA76	◎			○	◎		暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	貝殻条痕
104	siA147	◎			○	◎		暗赤褐色	暗赤褐色		
105	siA187	◎			○	◎		暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	貝殻条痕
106	siA180	◎			○	◎		暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	貝殻条痕
107	siA150	◎			○	◎		暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	
108	siA166	◎			○	◎		暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	貝殻条痕
119	siD112	◎	○		○	◎	○	暗褐色	淡褐色	煤突	ナデ
120	siD310	◎	○		○	◎	○	暗褐色	淡褐色	煤突	ナデ
121	siD115	◎	○		○	◎		暗褐色	淡褐色	煤突	ナデ
122	siD57	◎	○		○	◎		暗褐色	暗褐色	刺突	
123	siD204	◎	○		△	◎		黒褐色	黒褐色	沈線	
124	siD252	◎	○		△	◎		暗褐色	淡褐色	沈線	
125	siD73	◎	○		△	◎		褐　色	暗褐色	沈線	ナデ
126	siD129	◎	○		△	◎		淡褐色	淡褐色	沈線	
127	siD237	◎	○		△	○		褐　色	褐　色	沈線	
128	siD208	◎	○		○	◎		褐　色	褐　色	沈線	条痕ナデ消し
129	siD290	◎	○		△	◎		淡褐色	淡褐色		
130	siD48	◎	○		△	◎		暗褐色	暗褐色		
131	siD107	○	○		△	○		暗褐色	黒褐色		
132	HuB120	○	○		○	○		褐　色	褐　色	刺突・沈線	ナデ
133	HuB112	○	○			○	△	暗灰色	暗灰色	沈線	
134	HuB88	◎	○		○	◎		赤褐色	赤褐色	沈線	
135	HuB169	○	○			○	○	赤褐色	赤褐色	外耳	ナデ



第23図　下田遺跡遺構配置図



第24図　阿岩遺跡遺構配置図

第Ⅳ章　まとめにかえて

奄美諸島における遺跡は危機的な状況にある。天地返しといわれる重機を用いた個人の土壌改良が進んでおり，遺跡が破壊され遺物が散乱してからその存在に気づくことも多い。また従来の確認調査では小規模な遺跡を見逃すこともあり，それが畑地整備事業の事業区であった場合は，基盤の石灰岩まで粘土を取り，表土を集めてから，下の方に（基盤の落ち込みなどに）表土中の石灰岩を投げ込み，その後表土を戻す工法のため，遺跡は壊滅する。こうした実態を踏まえ，確認調査方法の改善を図り，また遺跡の保存方法について検討する必要があるだろう。今回の確認調査ではこうした点を踏まえて，長いトレンチを設定することとし，遺跡の可能性のあるところについては随時拡幅して，より明確に遺跡を把握することに努めた。このため作付け等の関係で確認調査が２次にわたった。

調査の結果，奄美諸島の遺跡の小規模性が痛感させられた。志喜屋武当遺跡において，住居跡が検出されたが結局１基のみであった。また中世と考えられる阿岩遺跡や下田遺跡の掘立柱建物跡の柱穴にしても，遺構として広がらない。志喜屋武当遺跡において縄文時代の竪穴住居跡が検出された。焼土面が２面あり，床面に遺物が残り原位置性が強いことから住居跡と判断した。土器の編年的な位置づけに検討を要すが，沖永良部島では浜須Ａ遺跡についで２例目であり，奄美諸島でも貴重な資料である。

出土遺物は志喜屋武当遺跡の住居跡とA地点を中心に出土した。

土器はⅠ類～Ⅲ類に分類した。Ⅰ類は轟式系の土器として、中甫洞穴出土の条痕文土器に類似する。口縁部分が欠損しているが，砲弾形の胴部に尖底気味の底部を呈するものと考えられる。沖縄編年では，条痕文土器と室川下層式が分離されて型式設定され編年されており，条痕文土器については曽畑式土器などとも出土することから縄文時代前期に，室川下層式については条痕文土器との型式的な近似と，西之表市下剥峯遺跡で轟式と伴うことから縄文時代前期と位置付けられてきたが[1]，最近室川下層式については中期中葉に位置付けられるとする説も出ている[2]。条痕文土器はいわゆる奄美の赤連系土器[3]といわれるものであり，本町の中甫洞穴出土の轟式系土器と併せて沖縄と奄美で類似する土器型式があった。Ⅱ類は器形・底部形態・沈線や突帯などから面縄前庭式の系譜で捉えられるが，突帯の刺突が異なり，後出の土器型式として位置付けたい。面縄前庭様式として各島での地域性としてとらえるか，現在編年されている中期から後期の土器型式の間隙を埋めるものか（面縄前庭式に後続するもの），あるいは全く別の時期の土器型式として成立するものか，可能性としてはこの3つを検討したい。面縄前庭式については，すぐ近くの神野貝塚により面縄前庭様式が層位的に出土しており，他にも面縄前庭式が出土する遺跡が知られており，時期的に並行する地域変容型式の可能性は薄い。面縄前庭式以外に器形・底部形態・沈線や突帯などで類似するのは縄文後期末の面縄西洞式土器や犬田布式土器などの時期になる。突帯の刺突のあり方が面縄西洞式土器に似ているが底部形態が西洞式が平底である。犬田布式土器で尖底となり器形で喜念Ⅰ式と近しいが，刺突文が異なり，突帯も台形でなく三角形である。沈線の文様帯も胴部まで下がらない。これには面縄前庭式よりも系譜がつながりにくい。後期の突帯を持つ土器は後期後半になって出現し，突帯をもつ土器型式と直接的につながって行かない点が疑問であるが，沖縄の仲泊式土器のように口縁部に肥厚帯を形成するようになると考えると，第10図の8・9・10・14・15のような土器がつながるものと考えられる。肥厚帯が文様帯として拡大し，伊波式土器や嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式土器へと展開すると考える。沖縄では，これらの土器はまとまって石川市の古我地原貝塚[3]で出土しており，面縄前庭式から仲泊式土器をつなぐものとして位置付けられている[4]。Ⅱ類の分類は突帯の位置関係で分類したが，口縁部に肥厚帯を構成するようになる視点でみると，型式変化が伺われ，後期前半の土器型式につながる可能性がある。以上から，とりあえず中期の末から後期初頭の時期に位置付けておきたい。

石器については，条痕文土器に伴ってチャートの剥片と磨石・凹石を把握した。チャートの剥片等に関してはケジⅠ遺跡や下山田遺跡[5]で確認されている打面転移を行いながら不定形剥片を剥出するものであろう。今後も各土器型式に伴う石器を把握し，石器組成や石材を明確化して行く必要がある。

1)高宮廣衛　1982　「沖縄諸島の土器」『縄文時代の研究6』雄山閣
2)伊藤慎二　1996　「種子島出土の琉球系縄文土器」『南九州縄文研究第10号』南九州縄文研究会
3)河口貞徳　1974　「奄美における土器文化の編年について」『琉大史学』第6号
4)長野真一他　1986　『ケジⅠ・Ⅱ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（38）　鹿児島県教育委員会
5)島　弘・岸本義彦・島袋春美他　1987　『古我地原貝塚』沖縄県文化財調査報告書第84集　沖縄県教育委員会
6)長野真一他　1988　『下山田Ⅰ遺跡』　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（45）　鹿児島県教育委員会

※遺跡の文献等については，第Ⅱ章の参考文献による。

図　　版

確認調査状況

発掘調査風景

図版2

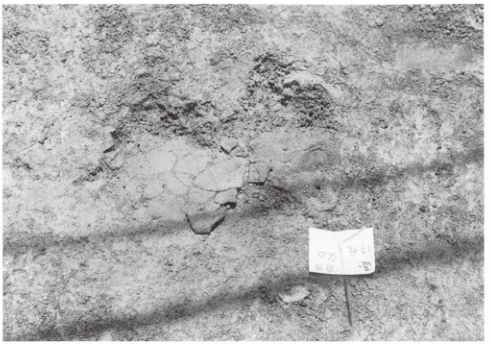
下田遺跡表土除去状況

下田遺跡遺構検出作業状況

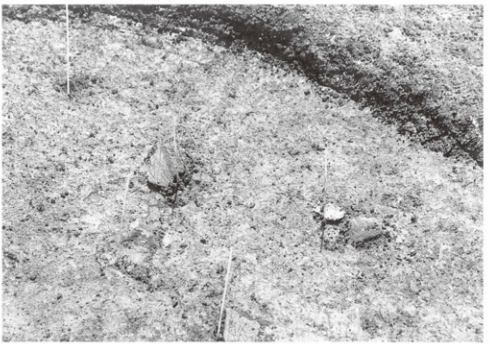
志喜屋武当遺跡住居跡検出状況

住居跡先行トレンチ断面

図版4



住居跡遺物出土状況



住居跡遺物出土状況

住居跡（床面）遺物出土状況

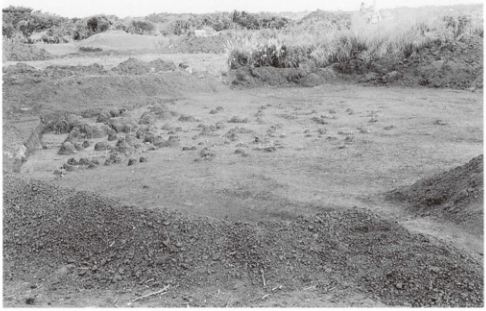
住居跡（床面）遺物出土状況

図版6

住居跡清掃状況

住居跡完掘状況

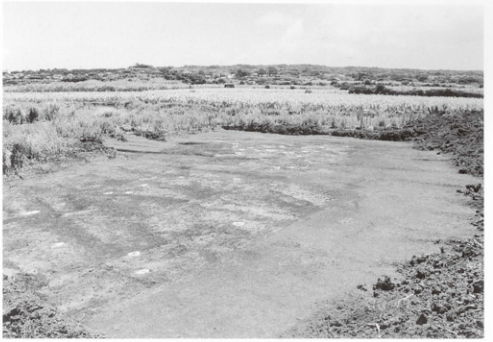
D地点掘り下げ状況



D地点遺物出土状況

志喜屋武当遺跡Ａ地点遺物出土状況

二俣Ｂ遺跡遺物出土状況



下田遺跡遺構検出状況

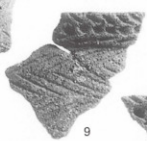
阿岩遺跡遺構検出状況

図版10

現地説明会

発掘作業参加者

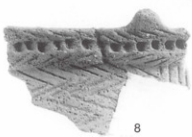
7


9

15

10

11


8

13

14

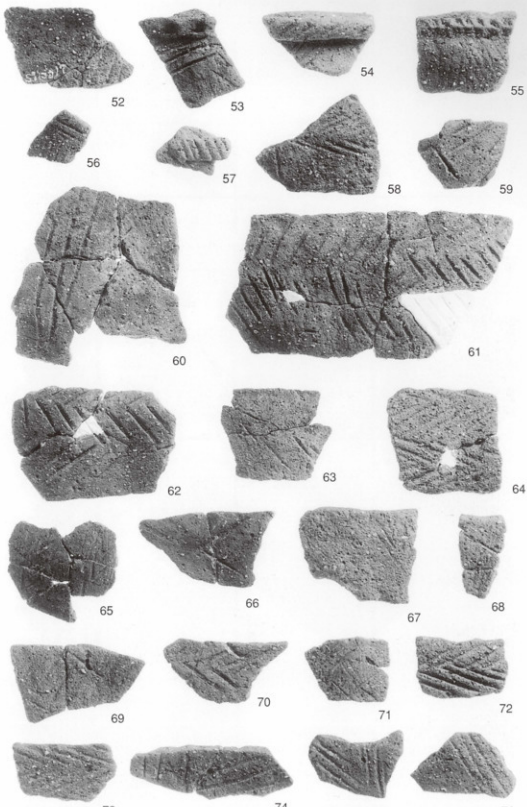
12

6

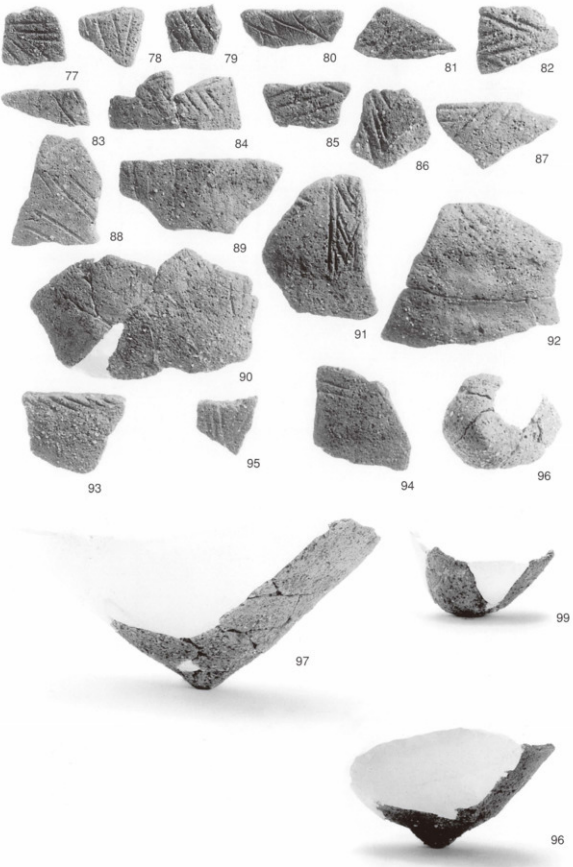
5

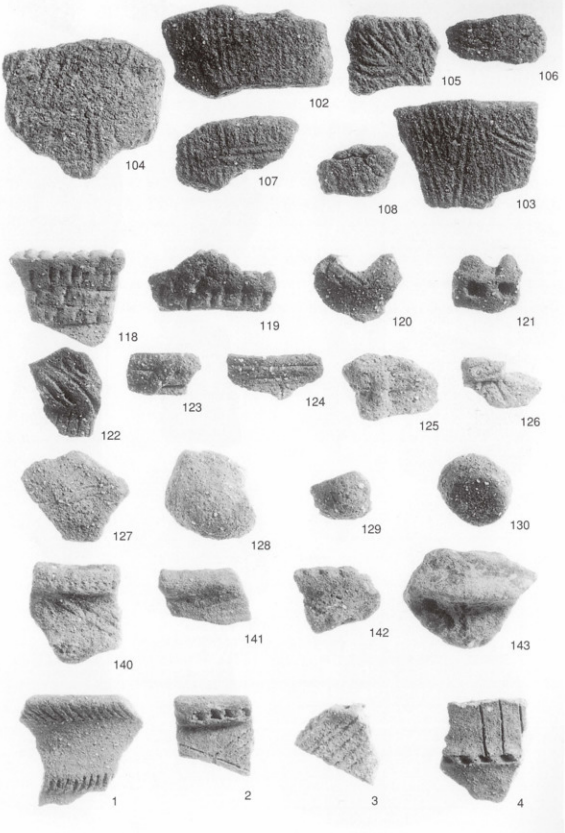
図版12

16
17
18
19
20
21
22
24
23
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
50
47
48
51
49

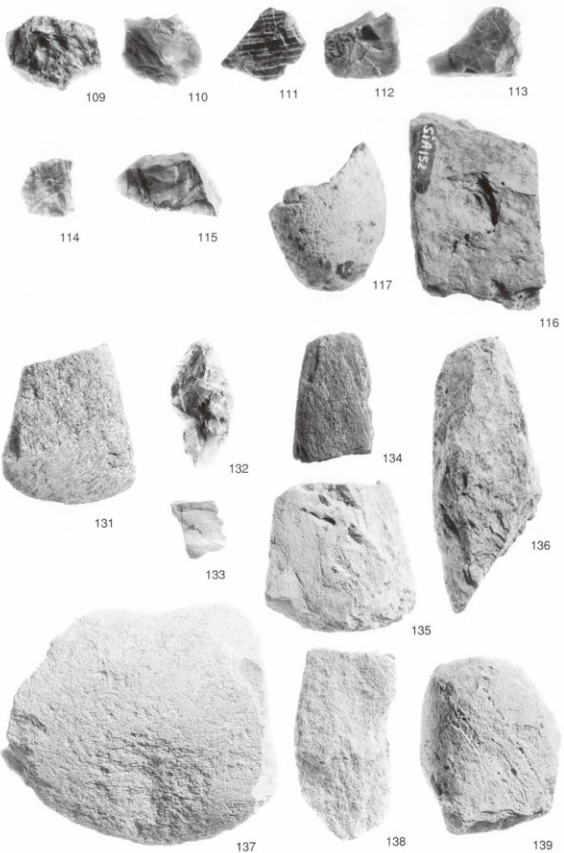

52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76

図版14




104
102
105
106
107
108
103
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
140
141
142
143
1
2
3
4

図版16


109
110
111
112
113
114
115
117
116
131
132
134
133
135
136
137
138
139

あとがき

阿岩遺跡に始まり，二俣B遺跡，下田遺跡，志喜屋武当遺跡と続いた一連の調査は，作業員の不足，梅雨，きびしい日差し，台風，そしていくつかのアクシデントが発生しました。しかし，関係機関の方々のご協力により調査は無事に終了し，志喜屋武当遺跡では，縄文時代の住居跡，縄文時代前期の遺物が出土するという大きな成果を得ることができました。

報告書作成にあたっては，整理作業員の皆さんに慣れない地道な作業に取り組んでいただきました。また，県立埋蔵文化財センターの方々には，整理作業開始からこの度の刊行に至るまでの長期間にわたり丁寧にご指導いただきました。

最後に，この報告書を刊行するにあたり，ご協力・ご助言をいただきました県立埋蔵文化財センター，沖永良部事務所土地改良課をはじめとする各関係機関，関係者並びに発掘調査，整理作業に従事された方々に深く感謝申し上げます。（森田）

青い空と海を望みながら，数人の作業員さんたちと黙々と粘土を掘りさげながら，自分のことや人生のことまで考えさせられました。悠久の時の１コマにいる自分をよく自覚できた遺跡でした。森田さんには初めての報告書となります。最後の編集等で苦労しましたが，今後の糧として大きく成長して欲しいものです。（堂込）

志喜屋武当遺跡
発掘調査報告書

2002年３月28日　印刷・発行

編集・発行　知名町教育委員会
〒891-9214　鹿児島県大島郡知名町知名307
印　　刷　渕上印刷株式会社
〒892-0845　鹿児島市樋之口町6-6